

椿説弓張月
 殘篇
 貳

~13
 3908
 26



さらさらなり。三十六の嶋人ホ。父傳れりのあふ。招じて従ひまゝ
 車。又小疑ひなれりのこと。いと信申す。勸めまう。は。朝と
 かく回答めら。王女紀平治も。いづれをよしと定め。て。志は。き
 を伺ふ。ちと小舜天丸。莞尔とら。ち笑て。今林大夫。いふ。こ
 みる。是信より。出。事便宜。小似。れ。安れ。小就。う。却危。夫
 龍蛇。大海を深し。とせ。底を穿て。これ。居ると。れ。人力の及ぶ
 を。い。あ。れ。あ。れ。餌をりて。あ。れ。誘引。が。竟。陸。致。そ
 べ。これ。一旦の利。迷。て。慾。小。身。を。忘。れ。に。ゆ。り。や。かく
 ち。父。佳。奇。呂。麻。上。赴。れ。あ。ひ。彼此の嶋人。ホ。日。平。は。後。ひ。ち。ち。ち
 ば。曠。雲。暫。の。といふ。こ。も。を。申。す。れ。を。志。す。る。べ。彼。既。知。り
 と。れ。の。時。日。を。廻。ら。ま。ど。して。攻。撃。な。ん。その。と。れ。今。茲。と。ち。父。の。機

運。よ。う。と。び。と。て。戦。つ。て。中。止。ま。さ。き。かく。て。六。ぬ。く。隠。す。に。あ。ら。う。
 且。の。利。は。迷。ひ。み。づ。ら。これ。を。頭。と。り。今。父。母。の。同。せ。ま。待。て。
 舜。天。丸。幼。弱。あ。し。て。議論。せ。傍。痛。く。お。不。さ。ん。親。の。為。に。あ。ら。う。後。を。
 ま。う。に。申。す。と。宜。へ。為。朝。小。膝。と。撲。お。ん。才。が。淺。薄。と。意
 小。稱。へ。あ。ら。う。は。この。嶋。小。あ。れ。へ。致。吉。凶。い。う。申。と。同。た。ま。へ。は。
 舜。天。丸。答。め。あ。ら。う。愚。意。を。り。て。これ。を。謀。る。お。ま。が。父。母。と。あ。在。人。に。
 小。環。雲。千。里。眼。を。睜。る。も。絶。て。あ。る。は。な。ら。う。後。に。故。い。う。申。と。る。れ。を。
 舜。天。丸。既。し。七。年。が。間。この。時。に。漂。泊。あ。ら。う。れ。を。彼。妖。僧。の。あ。ら。う。さ。ら。う。
 彼。り。これ。を。あ。ら。う。は。あ。ら。う。その。身。の。仇。と。な。す。も。あ。ら。う。と。し。あ。ら。う。
 され。が。こ。そ。舜。天。丸。の。恙。な。れ。と。知。は。れ。こ。の。神。仙。の。擁。護。よ。ら。れ。は。
 ち。が。父。母。と。く。に。在。ら。う。危。な。し。似。く。却。安。し。加。旃。家。君。巴。麻。崎。の。申。

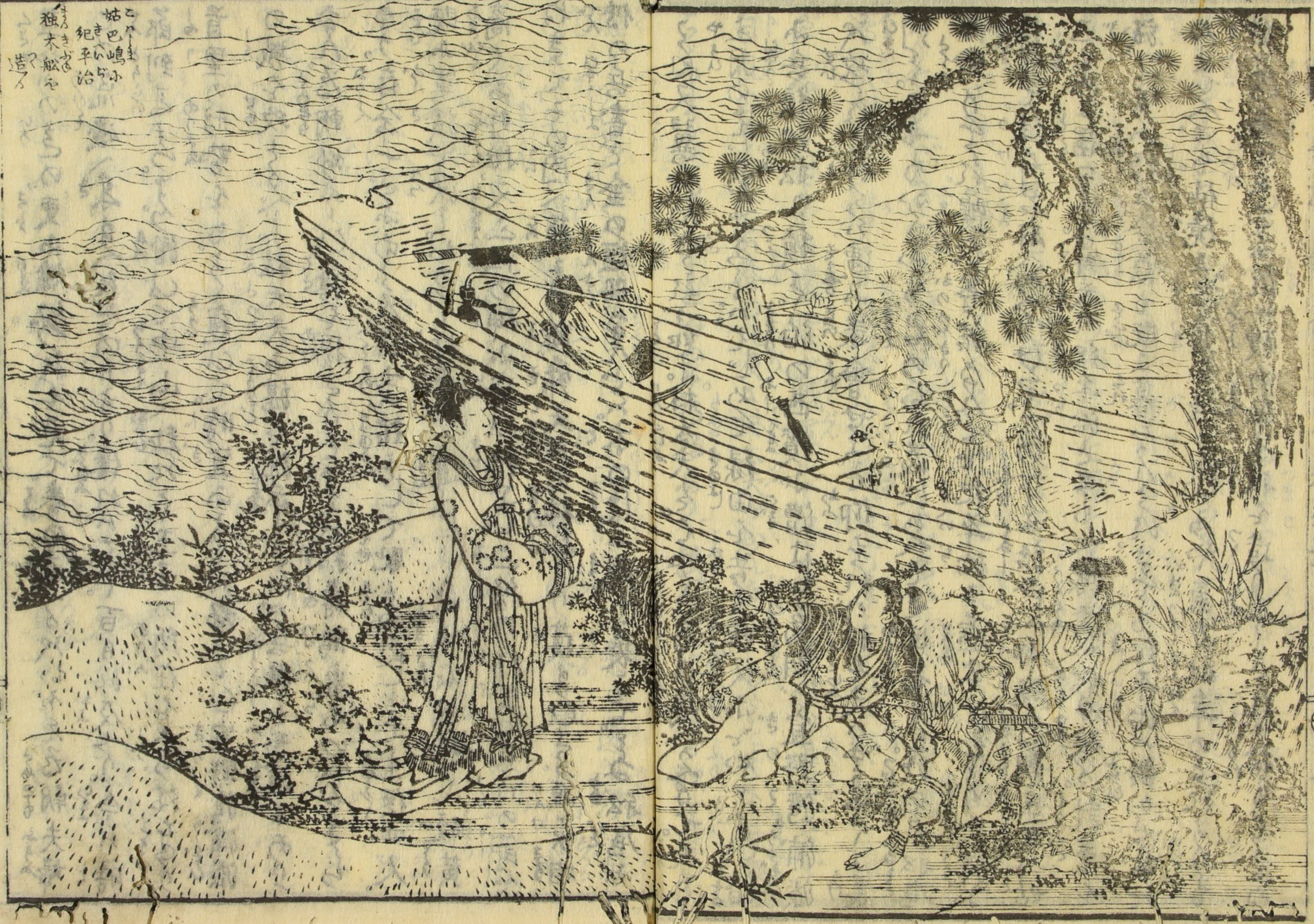
春丸の長月合貴...

神仙の引接及びて更ふこの姑巴島より多入り。巴麻を破魔めて
 悪魔を破るの義も稱ひ姑巴も盡破めて盡妖破るの義も近
 しが大日本めて童子ホが春のこじめ小弄ぶ雀小弓を破魔と名
 づく。舜天丸が弓箭を造りて神と祀するもあれも皆しく。是
 名詮自性と云らん歎かれむつが父破魔と盡破と二つの語より。
 再び起りて曠雲天討めり。再戦の勝利疑ひるし。只林太夫のこ
 久して今茲のこく母在せしと理を速く練めりへは為朝をこじめ
 とし。紀平治林太夫おいられす。於て聰明睿智お感服して。志を
 嘆賞あくるり。王女をつが子の伶俐さ。然ればお入りへは。此の
 あり。袂におく雲の涙坐お拭ひあへ。とげあや尺蠖の伸く
 とは。母志をその身を屈とといへ。む力。養ひ時を。先
 その才が屈して敵の不意お伸ま。軍威竹を裂が如けん。さ
 け。と。や。と。宮。あ。不。為。朝。し。疑。ひ。を。決。して。遠。小。謀。を。定。む。林。太。夫
 と。潜。中。り。母。佳。奇。呂。麻。一。か。つ。れ。色。し。と。仰。ご。ろ。母。を。林。太。夫。の。今。ま。ま
 母。推。辞。を。お。れ。へ。う。の。あ。ら。は。れ。も。志。だ。か。ら。り。の。も。別。と。も。ら。ん。子
 いと。奉。意。さ。し。か。る。べ。し。と。お。り。ひ。う。け。ね。と。糧。米。も。夥。齋。し。且
 按。司。王。女。小。進。ら。せん。と。鳴。織。の。衣。な。ご。も。り。て。又。船。次
 巖。か。う。い。へ。乗。り。け。破。損。せん。と。の。為。母。斧。鋸。鑿。釘。入。唯。伎
 志。て。の。母。え。れ。ば。この。鳴。也。の。羅。漢。杉。の。大。木。多。う。り。鳴。の。習。俗。な。れ。む。
 某。も。船。造。れる。ゆ。い。を。さ。く。え。る。れ。て。ゆ。い。の。母。田。ら。ば。春。ま。ま。に。
 軟。く。軍。船。一。艘。を。生。築。り。出。し。ゆ。べ。し。ま。げ。て。田。め。り。ひ。福。と。い。と。叮。嚀
 小。希。へ。主。後。と。よ。その。志。の。洗。う。る。を。稱。嘖。と。す。て。為。朝。の。宜。し。

春兎子長月合遺書下失卷之二

四

姑巴嶋
紀平治
独木船
造り



長月拾遺集

長月拾遺集

五

草壁のきの更ふ添りつねをえて春のまづるにわがえの朝夫婦
 この荒磯へ来りてその日より僕れはとや百日に及り。今の時
 節到るしつ。あつ溜びて中山へ赴ん。王子の所在を未だ知らず
 首里の形勢をもよく窺ひて時宜ふよふに好む。ひ宜野湾浦添
 の城を攻とるべし。林大夫お謀を説示しつれば。兵糧を西濱あり
 るんを朝めつひ熊を揚とるとまゑ。松壽鶴電おひくがさら
 あり。存命てふあふん兵士の招として馳とありてとて。主後四人
 既お軍議を決し。おのり林をまゝ進じし。嶋を破り。硫黄
 商人お打扮又三社の神お奇ひ記し。三條の社矢を竹の節を
 ぬきてその内へ籠。その餘桑天丸の神仙より獲まひし。源水目
 傳の兵書と金の短冊とんご。木の皮お纏い果して。とら松底お
 隠し入れおひく。日次吉日にして主後件の船お乗の。遂は瓊と解
 行お紀平治の楫を操り水行し。孰と漕ぐ船の。春は殊まら。浪静
 めて嶋山遠く見えれば。残る人のあつ。縁とも年来日暮。伝と
 るれ。名残もさらし。浮世をたのぶ旅なれば。那覇と泊の
 湊へよつ。北へくと漕ぎし。ちて愁眉を開く。され運天山次
 目的めて名護と羽地の間ある。大栄河お乗入れたり。凡この処まぐ
 の海一百里中もあつ。れへは。まきのふの曉お。姑巴嶋を生く。けへそ
 ちや。日のうちらに。輒く着岸あつる。ふ。人力の及ぶ所。あつ。加旃
 山を運天といひ。所を大栄とらふ。その名おおいていと。愛し。且
 南は名護嶽あり。西は。今帰仁あり。君子名ま。民今帰仁。
 されも亦つ。君の武運をひく。れべ。前象ありとて。紀平治。

春日山記 卷之三

只顧小祝しむるも真あれが。みな笑壺かぞ入りくもか。かく
 秘をば大栄河を乗渡りて各行李を脊負ひ行囊に項かむをけ。
 名護と佳楚との山間より恩納嶽のかへ赴たるもうらま主従
 四人おほし道を。りちもに走りのる人小あやしめらるることさや
 とて為朝の舜天丸をおて二里あまの先より王女の紀平治と
 ねて遠小後れての西より宿借らばその簷に織を出し
 おくさしと豫て示しあじも人ど。ろろ山路のみを踰つ竟
 人煙をえんがしりく。ゆるく小後をえらしてその夜之恩
 納嶽のほとり中露宿しつ明さば亦路をりそがしたまふふに
 王女を曩ふこの山も志し整りて查國土に環會又と國耕
 新垣亦が忠魂小償せられ。志むく危窮を脱ししも今ハ八年

の夢の跡これの覚もその人の面影と亦幻あも。るるはは
 かねを果敢うと。これより路を東南よりて越来の山切み入
 ろふ。つへ彼真跡が軽きと跡とえくれを名のとそ。朽ね石橋母
 涙や凝く昔の流散。かめ恋まきて路さりの人ぞ立在りの次
 人こそあつら。と紀平治も扶掖れてやうやく小中城の東なる姑場
 の山里小あまへ。日と西山に傾きなり。寔よこへの廉夫人のこあつら
 刃伏あふ。むじつづらの油樹も母の形見と身と絞る袖のこ
 いと露けくて。あまじ歎きのぬしや誰。建てよりまご遠うらね。
 卒都波女入えてもらうらかしく。外の功德を身よあめて。志ば
 念じて伏拜し去んとしていくそ。び亦らるる成は樹下蔭
 ま日家の闇と夕ごえて。孰う人や鳴く山鳥と共み。樹をりとも

春風集
 卷之三
 七

あまのひね

第六十回

燭を秉て山妻客と留し
劍を借る樵夫婦と俟

さる行舟為朝を舜天丸をいそがして山下ぬくまけ入るあふ
その日も既暮果て人影罕なれ谷蔭よしく一行の白屋
ありけし芭の稚葛風戦ぐ葛又より細き燈火の幽よりりて
んえしうば斤折戸ふまよりてまづ密守り小廟を規め人を年紀ハ
三十あまのしめて山あそころあいと似げられ顔も八九分の
あれと天目一の命の炊きあや偏目盲目なれ賤婦が芭蕉布
織てたよりきたる。爐小林火さるるれふ一柴の生樹の煙いせ
霧の中なれえうとむなく昔と志のふ面影ハ由緒よれ人の
零落と。津の宿ふ世とや避ぐんかむりの処は宿りを借と
身の仇とけれるのあふ。おのひくけなやと耳活る人ハ舜天丸も
それハ闕窺昨夕一夜さ露宿して目睡ともなくあじこれハ
母君さそな疲勞な。都家さなれ孤館とさうくお憚る
かこもゆつと。今宵とすのにありま入しと回答めさふさふとて
半崩とかくし斤折戸を推よりえて為朝ゆがてすこいれ
と山路も暮れし。これ旅客なり。この夜をぬきしとびてんや
と親子りちとも呼門あへ。彼賤婦ハえかつりつ。忽地機
とてさ。先簷端にかよふ松の風色根ふ木鳴く響より。外あ
とえて音はる。あふあふね孤館も。縁ハあれハこそ踏ゆく
人の宿りを乞う。あふあふ。あふい出て家ハあふと山下なれハ

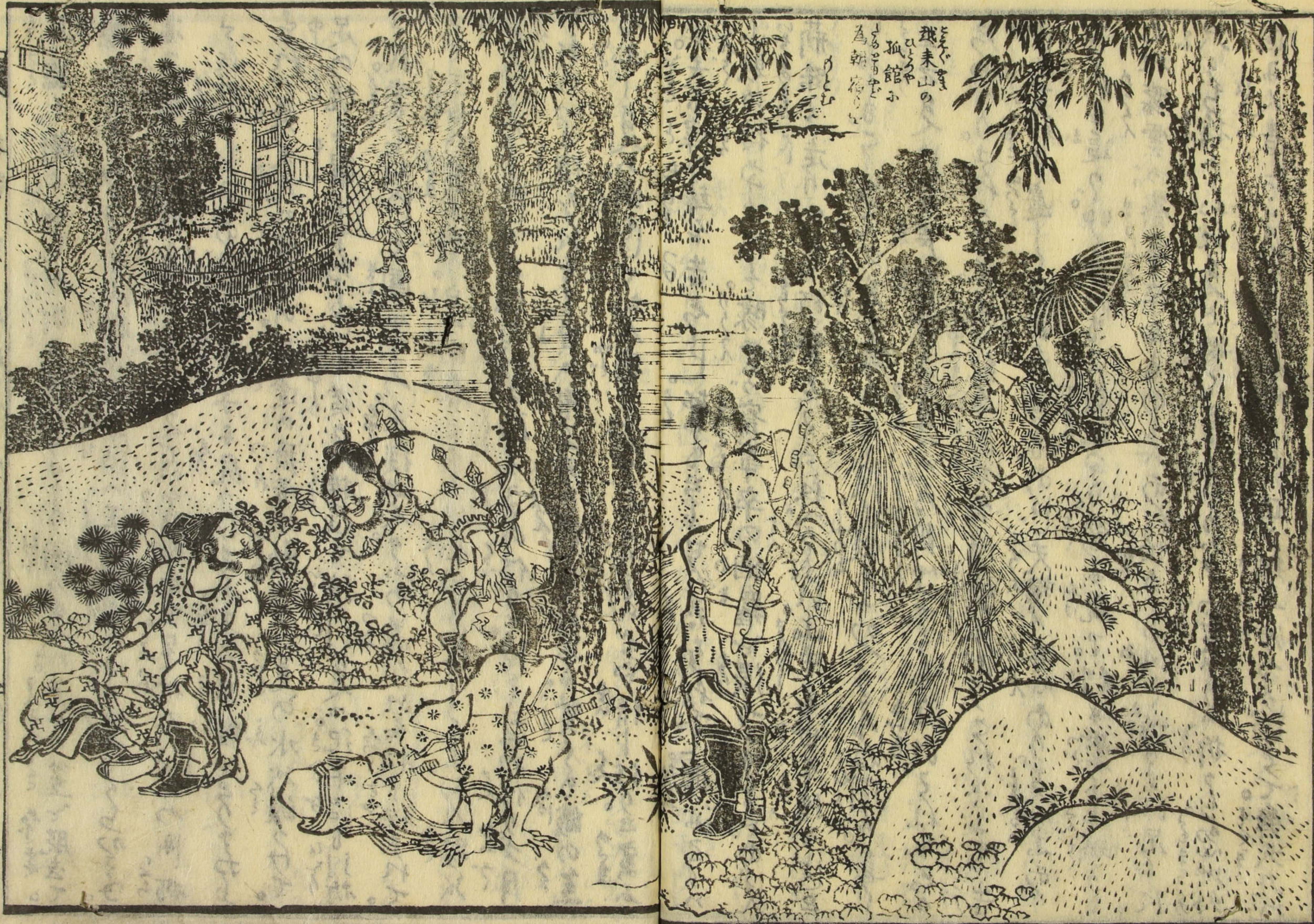
持説三張月拾遺篇下帳卷之二

馬路ふ遠し。人のあごく。雨のさうなり。月まゝ漏れど。透間の風を。
 御ふべたまふ。も付く。夜の会衣と夫婦の外。被げまかり。さる。
 料のなけれど。これをも厭ひ。あつどの宿り。まひ。ほと。ひ。入。お。
 款待ぶりに。親子の野路の驟雨。まき。ほ。り。な。れ。を。持。し。て。そ。の。
 方。ら。と。ま。ま。も。あ。ら。に。卧。房。が。お。貸。り。り。頃。日。の。暖。さ。会。衣。を。
 と。欲。う。と。ご。女。子。ま。人。侍。し。と。れ。う。些。一。後。し。れ。ど。今。く。さ。や。追。著。
 ら。も。あ。ら。し。ま。へ。と。し。ひ。う。け。て。為。朝。の。脱。し。る。を。と。斥。折。戸。に。結。び。さ。け。
 した。王女紀平治が。目。標。し。し。親子。ひと。しく。竹。簀。子。に。尻。を。う。け。て。
 草鞋の紐を解る。人の賤婦を。藤。蔓。の。蔭。せ。し。桶。に。水。を。汲。入。れ。
 ぐ。為。朝。舜。天。九。お。足。を。濯。が。し。掃。ハ。稜。の。こ。逆。毛。と。破。と。席。成。
 かん。拂。ひ。つ。こ。る。こ。へ。と。誘。ひ。バ。や。と。ら。ら。あ。が。れ。為。朝。の。後。方。の。眼。
 舜。天。九。も。地。火。の。ほ。と。り。お。け。を。右。の。へ。海。螺。の。竹。を。押。曲。す。
 土。瓶。め。れ。と。れ。湯。も。よ。れ。は。ど。母。沸。か。し。は。を。木。椀。の。碗。に。汲。
 なら。べて。ま。し。し。お。せ。が。受。り。ち。て。親子。左。右。を。え。う。た。ま。う。あ。お。壁。
 お。ら。て。骨。と。わ。ら。い。し。柱。を。朽。て。皮。と。さ。り。ん。携。夫。の。家。々。と。お。り。ま。
 獣。皮。も。ま。し。り。山。賊。の。隠。宅。や。と。ま。と。ご。母。を。放。し。か。さ。て。し。ら。
 何。処。へ。と。て。う。旅。を。が。ま。あ。ら。ら。あ。の。耳。を。れ。ぬ。お。の。ひ。ま。ま。り。
 と。つ。み。朝。の。つ。が。う。人。の。曉。も。あ。ら。と。り。や。と。いと。使。す。へ。お。り。ひ。
 お。づ。と。ま。ま。し。め。の。え。せ。ま。つ。と。ら。お。ご。と。く。吾。們。の。於。我。乃。備。島。
 なる。硫。黄。商人。の。う。が。幸。か。た。る。の。こ。お。ほ。れ。お。都。會。の。地。の。格。別。
 お。生。活。の。よ。と。が。も。あ。ら。ぶ。く。多。し。て。此。度。妻。子。ま。お。て。の。ち。り。お。つ。る。お。

春説の長月拾遺篇の失字

ちうらうらうりも。又浪風静まらば。同切毎ふ新園を居る。松の
 往還を許されざと。父えしうが。山南者なれ。知己のうらざし。徑
 せんとしてかくのごとく。山路よ入りて。迷ひまづ。今宵の宿り。一刻
 千金好意と。忘るべうら。さて。もあは。の生業の。ゆるる。あまふ
 らんゆ。くざらう。こにおち。かて。後の。再び。訪て。些む。りの。報ひ。す
 らく。あり。み。なり。名告。あ。し。ま。り。し。と。室へ。賤婦。あ。て。う。ら。け。う
 え。笑。こ。ん。ろ。ろ。ぶ。と。く。日光。も。疎。き。山。中。の。生涯。を。お。つ。う。う。夫。と
 毎日。小。薪。を。推。つ。り。こ。ろ。六。を。芭。蕉。布。と。織。り。これ。を。里。ゆ。り。く
 出。て。露。の。命。と。繋。ぐ。の。と。名。告。る。べ。た。名。も。付。く。孫。の。後の。報。ひ。も
 願。ひ。の。う。ら。に。現。お。定。り。な。れ。い。世。の。う。ら。と。う。ひ。なり。天。孫。氏。の。御。裔
 亡。び。ま。し。大。里。の。按。司。為。朝。ね。ん。は。し。す。れ。軍。兵。を。起。し。ま。ひ。て。
 嶋。依。あ。て。猛。火。よ。焼。と。王。女。も。その。日。暮。れ。も。ひ。ぬ。と。父。え。し。ふ。一。度。の
 中。の。骨。を。残。さ。ざ。れ。は。為。朝。夫婦。虚。死。して。脱。と。去。ら。る。な。ら。ん。と。く。
 驟。雲。法。王。の。う。ら。と。安。く。あ。ま。の。と。彼。此。お。戻。と。居。旅。客。な。ら。に。宿
 貸。ら。る。ゆ。も。許。し。ま。ら。ば。か。ん。亦。彼。為。朝。を。捕。捕。と。も。好。ま。れ。と。も
 志。て。首。里。へ。あ。ま。が。按。司。よ。は。し。ま。ら。べ。り。官。職。願。ひ。か。ら。と。と
 ま。う。は。り。の。ゆ。の。生涯。坐。つ。食。ふ。も。餘。の。れ。金。銭。を。あ。ら。る。じ。と。て。
 残。る。隈。も。な。く。父。え。志。し。ま。ら。べ。り。浮。世。お。遠。き。山。よ。住。め。ば。この。檄
 文。よ。め。れ。と。と。夫。を。を。り。く。里。へ。ま。く。ま。く。都。の。風。声。も。父。け。り
 に。後の。祟。こ。と。怕。れ。へ。た。れ。後の。善。報。お。受。ん。と。て。客。人。と。ら。と。笛。ひ
 ら。れ。と。か。の。都。人。を。慾。多。く。情。薄。し。と。父。け。れ。と。形。こ。と。かく。鄙。ひ
 と。れ。と。が。良。人。の。俠。氣。あり。て。物。の。情。な。る。な。れ。は。今。も。あ。れ。ゆ。り

春記 長月 合貴 下巻之二



春入心長中合部

越来山の
孤館ふ
為朝宿の

林説三張戸拾遺篇下帷卷之三

三

侍るが。つらつら宿処あり。とぞして行るる。忽地懐より。斤木一枚
 を落し。咄人として拾ひて入る。一人田土夫婦と記せり。王女を
 是を以て。熟文字のうろを按する。一人を合とれば。大田土
 をあつた。バ里なり。大里の夫婦と。八郎按司と。つらつら宿。まてハ
 彼を中も。稽して。今宵替も。ちか。その支堂も。編み。され
 割符。あやと。おぼし。ま。つら。樹下。あて。ら。相語。れ。癖者。亦も
 是。彼。お。は。駭。討。せ。あり。た。れ。う。ま。と。室。ふ。お。り。ひ。あ。り。ま。は。し。の。ま
 な。れ。ハ。彼。賤。婦。を。追。ひ。ま。へ。て。後。の。患。を。除。ん。と。て。え。之。お。や。や
 往。方。と。あ。ら。じ。毛。を。吹。き。疵。を。求。ん。り。そ。や。く。兩。君。并。告。す。か。せ。ん
 と。深。念。し。て。主。後。只。管。走。り。け。や。う。中。へ。宿。り。ふ。い。づ。様。あ。て。ら。う
 と。い。ひ。う。け。て。件。の。擧。を。ら。り。お。と。声。り。ら。さ。じ。と。密。語。の。は。じ。め。り。り
 を。す。果。て。舜。天。丸。頓。再。嘆。息。一。父。君。は。し。つ。れ。今。紀。平。治。の。生。り。の
 ところ。い。よ。疑。ひ。か。れ。め。ま。ま。て。その。を。走。り。出。這。奴。ホ。が。畏。れ。

脱。と。ま。い。と。危。し。と。速。多。く。為。朝。を。只。点。改。す。か。の。ま。は。じ。の。婦。が
 い。び。つ。る。亦。その。夫。の。歸。と。ん。と。て。嚮。外。面。へ。お。も。る。王。女
 紀。平。治。は。脱。あ。ら。じ。舜。天。丸。あ。ら。じ。言。語。を。盡。し。て。つ。ら。に。あ。ら。へ。危
 と。い。ふ。その。危。れ。を。ぶ。れ。も。あ。れ。り。あ。り。と。い。ふ。も。敵。を。え。て。一。歩。退
 け。の。敵。又。一。歩。進。む。の。進。退。彼。と。我。あ。る。の。事。執。り。竟。は。脱。し
 かに。天。運。こ。に。循環。せ。ハ。彼。矇。雲。を。伏。拂。ひ。く。天。津。日。光。を。民。小
 見。せ。る。ん。り。つ。ら。武。運。あ。ら。じ。野。人。山。賊。も。勝。が。と。ん。勇。士
 へ。且。く。物。の。落。小。鯨。れ。よ。婦。が。夫。を。伴。ひ。か。る。ま。ら。あ。ら。じ。と。大。夫。の

おそれぬ日本魂不練めかよと我主後之人まゝとて些一奥まうり
 たれは屏風を引鏡らし蜘蛛の細拂ひくぢくひまへは朝へ只
 ひさの燈火吻と吹滅て圍き中あそひしるふその夜も既ま真亥
 中とくど鐘もおとつれを隙洩る風と谷川の音のこつと裏きん
 かくし経小外面小忽地人の足音して片折戸を推開きおほの声
 とおやしくて千歳こゝと数回ほびながらややくに地元のふと
 お探り著さても吾妹子がいぎとなさよ埋火一ッおひして何所
 あり睡寝とれまご甲夜するふとひとりおちこまやあるとあから
 家の狭き狐鳥夜のとりほみく務手おぼえに棚乃隅壁のし
 の懸ひ呂おひしておがてうらつけて引はしおのり行燈へうつを火光
 おあつげも對ひけしと我為朝と面をおひしてらち敬馬丸八郎
 按言ふれりまげやあはしハ松壽なり々れまおやぐいり舟とむうりに
 りける発燧の燃はしを膝へおとして亦く裏拂ふ栲のつづれのけられ
 糸ある慢るりとかしとみつ松壽ハ些一引さうりて破るる襟をうれ
 あいやん何よりりまおひへき去年長川の敗軍軍大将の往方
 をあつげに縁果てあのびくふ索まなせが既小島袋あて猛
 火は焼き灰燼となりあひぬと人もいひるれもあるあへは込感
 あらくゆりかたななれど白骨なりとも拾うんとおはひりりた自
 殺もほせど是首被首に身を屈して一日二日とちうるあど小
 王女も亦大里山おて移れあひぬと笑えし久望ハこゝに絶ながら
 遮莫蒙雲を一刀うらみて死る死てん女くした死がぬさぶきみ
 あつげと志を激せども鶴亀も移れらんいひがひなれ雜兵

春記の長月拾遺集下巻末巻之二十一

二一六

木とさる四雲ハ落よりのしうば。孰と相語人よとふもるし。救心
 再敵中あられて生拘らるることもあふ。何の命なりと怨心
 雪入溜ふふあらしと必ひ定めて遂中樹小縁草お伏し。越来の
 山よりけり入て。きのふと暮しけりとあつた。日の光も疎に谷渡も
 春中ちひさくハ霞より。なほあじなれ大將軍。再會し奉る
 歎びこれ小まなごとなしと首尾を扱がりていと信や小歎待
 ども為朝さうにうち解らるべ。いづか所さもありのらん。志うハ
 あれど頼とがたれハ人の心なり。かくまて忠義があらんとす。ハ
 なぞや婦中倍れ割符とりて支堂を呼び聚い。為朝を奪ん
 さいせられし。さくろぶがじと宣へば。松壽一切をひくけ。某妻を
 取かりハさよ迷ひて志を後さふあふ。に。鬻まされむとく。件の
 女子ハ。偏目こそ盲られ亡妻の終の面影。いづかある。おあれの
 かりに。公さまりと信やうなれ。あじ。深き。あめ。らん。あ。これ。水
 小舟をよし。のり。亦らの山下の。獨夫。志氣。あ。の。の。の。か。さ。ひ。

張ひ車さるもに。婦殺まん。と。竊は。謀り。し。の。の。あれ。と。君。真。物。中
 照覽あれ。我を忘れて。勿心地。威豪。中。著。松。壽。な。ら。ん。人。を。あ。せ
 多の。ぬ。軟。と。言。う。を。変。て。怨。と。れ。ハ。為。朝。呵。く。と。冷。笑。ひ。枝。世。俗。の
 常言。論。より。證。拠。と。い。ふ。と。あり。衆。皆。あ。よ。と。言。ひ。け。り。あ。ん。を。延
 屏風を。捨。置。り。つ。舜。天。九。紀。平。治。り。も。も。に。王。女。ハ。前。を。出。て。松。壽
 小對。ひ。東。風。平。按。司。の。隱。宅。さ。り。あ。つ。て。宿。り。し。親。子。主。従。慰。免
 ほと。あ。の。あ。つ。た。糸。さ。も。御。向。よ。ハ。足。下。の。支。堂。と。あ。ほ。し。野。野。の。野。伏。亦。が。

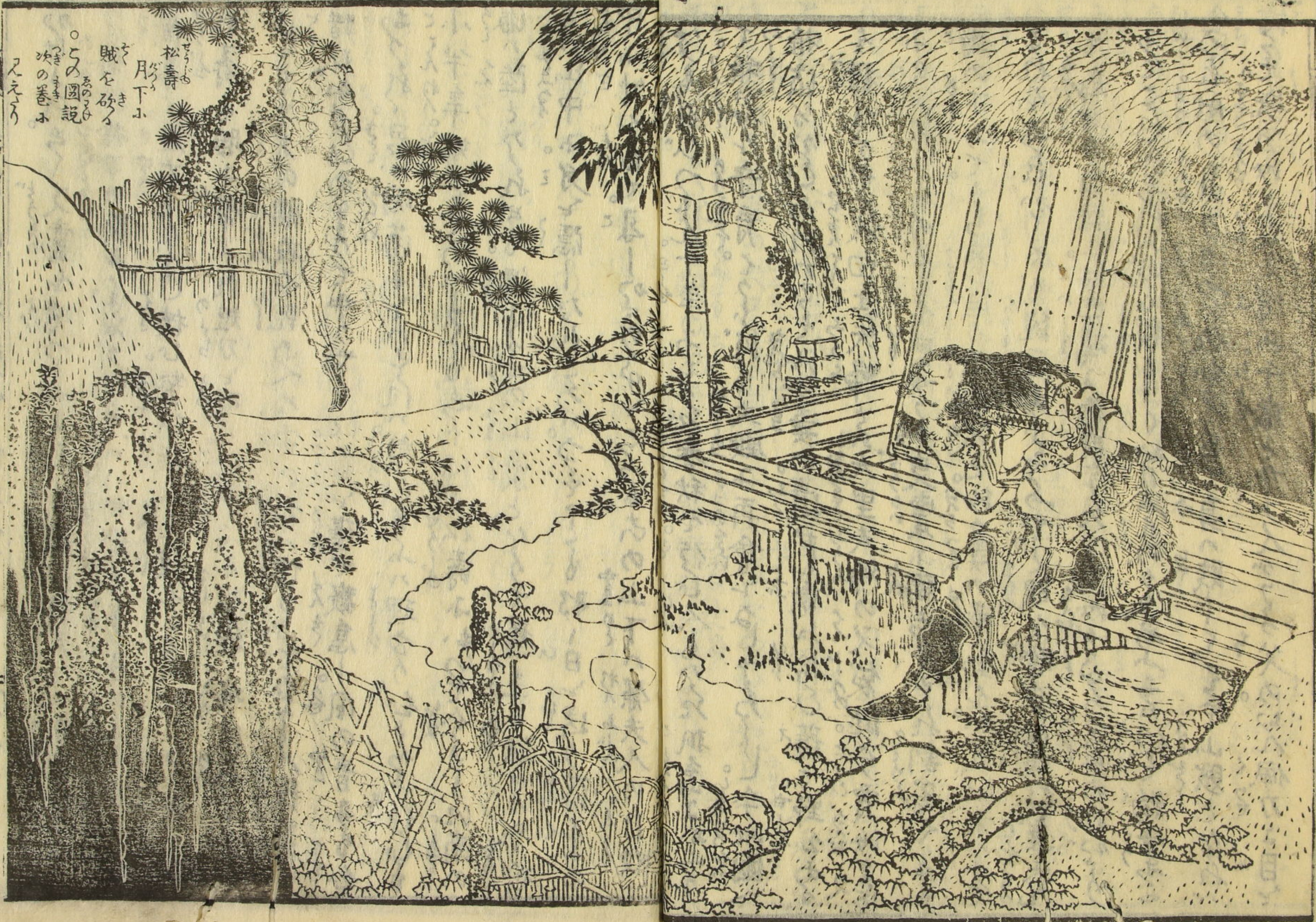
春言三張丹抄進篇下巻之三
 十六

樹の下に立集合八郎按司と捕捕人と密中り小高溪とてうらむ
 途あり竊せせりかくしへあが仏をさるふよ似されども八郎按司と
 自然天地神明の冥助をせぬ嶋袋も猛火を脱れ夫婦ひら
 ぬ路をまゐりて佳奇呂麻人講引船を姑巴島の荒磯よはして
 生死存亡あるはまゐりし舜天丸紀平治亦環命請けお春の
 日初をすち好て更お兵士と集んとも亦彼此の八重山越身お
 ちり谷川の水へ元来清たれど濁りし足下の底意をさる結目多
 うね細代戸の藤の素鮮はあつともちりしひそくにはまゐり
 とりたまたま紀平治と拾ひし概をさり出して目ちかく松妻お
 ぼし著つ行燈の火口を推向いりちの概をさるりや日本琉球
 異なれども八郎為朝の老堂小八町碓紀平治ありと八十年

すも及びつとん十年あらう春秋を修む人も久し孤島におつ
 て稚君を守育とうらびも大殿お再會をなすかりし今此國へ
 推流るかひあれはこそ汝の妻の遺せし概を拾ひ獲て野をある
 を猪しつれ一人田土失婦と大里夫婦の又袋縫今宵汝を
 おらふをしそのよしを密中り支堂お觸るを割符くとも
 樹の下めてうち高溪の悪棍おと汝の妻の挙動をおりいあへて
 これをあらかめても鏡をあらそやと眼を腫れし馬の森丸
 も肩まりあはし姑巴嶋のあしとんより汝がふり父母のおかめ
 みてこれをあらけいと頼りくおりのうらふよおん似を物堂お
 へお財の身方々の仇かごとて身へ賤しくく平山賊となれば
 らも既汝の妻と噂ふ千歳とやらんかうろ父のおん佩刀は目と

春説呂張月拾遺傳下巻之二

七



松壽
月下
賊を破る
この國説
次の巻小
ええり

春

木

言

日

月

星

雲

霧

雪

雨

風

かけられ。そく支堂を喰つとくよ敵手擇ぬ舜天丸の本事と見えん。
 と肩投捨刀の鞘も手次くけすへハ所磔も筆子の上小刀乃瑞
 衝ま。左右よりさし挟む勢ひ猛し主後を。とらんかりんは。陶
 松壽も腰に帯られ短刀を取て紀平治丹投。虚し項に伸し身を
 はしても。身の濡衣を乾ぬ。雲の命へ惜う。て。あ。ん。後。の。名。
 惜む。ありひあまりて。やうやくに。首と擡て。歎息。一風の音。身も
 あう。ね。君が。凋落。か。と。い。れ。の。疑。ひ。ま。あ。の。理。あり。む。と。ん。お。位。し。も
 小半年。婦。と。ろ。の。へ。う。も。あ。ら。ね。松。壽。小。お。し。て。今。ま。う。に。南。の
 海。陸。と。り。れ。ら。も。濁。る。世。の。山。豪。と。り。て。舊。主。み。冠。せん。や。抑
 ろ。の。山。中。お。身。と。隠。し。た。れ。と。い。ふ。も。あ。も。こ。も。あ。い。日。と。送。り。落。る。お。の
 中。お。竹。を。白。て。身。一。か。の。の。ゆ。と。う。ま。あ。の。山。下。へ。廉。夫。人。の。自。殺

多くは姑場も近く。又亡妻高橋が。移れ。越。来。の。石。橋。は。程。を
 か。か。移。が。せ。て。て。の。か。れ。跡。吊。人。と。足。引。の。谷。も。あ。ら。ね。山。松。次
 劍。り。て。削。り。し。か。が。二。本。の。宰。都。婆。を。造。り。て。夜。は。紛。ま。て。彼。知。り。赴。れ。
 これを建てま。つ。お。身。偏。目。盲。る。婦。女子。ひとり。木。と。賣。て。ゆ。に
 め。ひ。ね。假。初。ま。が。ら。お。の。ひ。く。け。ら。れ。ま。が。その。の。り。の。う。人。又。回。り。彼。と
 推。夫。其。甲。が。女。児。な。お。よ。近。属。父。母。ら。つ。つ。て。て。身。ま。う。り。あ。れ。山
 崎。と。こ。う。お。ひ。と。り。住。ご。も。憑。む。べ。れ。親。族。も。あ。ら。な。い。か。く。も。命。
 惜。れ。り。の。ふ。て。柴。を。伐。て。布。を。織。り。且。お。日。玉。戴。り。て。里。へ。出。た。お
 と。月。夜。負。つ。て。山。中。ゆ。る。こ。う。は。そ。と。お。推。量。あ。れ。と。う。ら。歎。く。物
 の。い。ひ。ま。は。回。れ。お。よ。故。妻。又。似。る。や。る。似。り。け。り。と。い。ふ。も。お。の。悪。ひ
 めて。お。つ。母。一。樹。の。蔭。よ。宿。る。も。他。生。の。縁。と。て。捨。り。し。忍。び。と。我。身。と

昔言 月合貴 卷之三

人を死ね己るんく。といひもめんと。左手を死ねかくりつ。柱の
 下を倚りけし。礎の礎を引きて。ふらふら頭を打碎んと。さうりし
 かば。彼を死ねよと。為朝のいも。遠く命を死ね。天丸紀平治左
 右より。拳を振り腕をひきさめて。や。礎を棄つ。いも。松寿
 そいも。自と羞く。更か改を。も。擡を。當下為朝を。松寿と折
 えて。頼重。嗟嘆。東風平按司が。年未の忠信。いも。ひく。あれが。
 今い。所給。いも。信りの。女。按司。これ。も。亦。噂。雲。が。幻術。
 の。う。と。正。し。て。足。下。の。う。ろ。を。蕩。して。為。朝。を。斬。り。て。め。飲。
 ぶ。い。が。彼。千。歳。と。ま。ん。も。妖。婦。海。棠。が。類。る。か。げ。さ。れ。ば。こ。そ。
 件。の。婦。嚮。よ。ま。ん。く。為。朝。が。腰。の。刀。に。め。か。け。さ。れ。つ。が。い。の。刀。の。
 源。家。の。重。宝。鬼。切。時。鳩。よ。異。な。る。が。為。朝。い。ぬ。嘉。應。二。年。の。秋。

讃岐國へ赴きて新院の山陵に詣りけし。夜君を。いも。を。いも。
 父の。いも。廷尉。為。義。兄。なり。ける。左。衛。門。尉。頼。賢。掃。部。少。輔。頼。仲。
 加茂六郎。為。宗。源。七。郎。為。成。身。流。九。郎。為。仲。亦。至。る。ま。て。夢。の。
 中。み。た。ま。を。現。し。世。の。か。り。い。く。べ。光。景。を。うち。相。語。ひ。多。め。行。く。松。の。
 風。小。驚。れ。覺。れ。枕。方。一。口。の。室。劍。あり。これ。の。足。保。元。車。ある。
 除。目。行。り。て。上。北。面。よ。か。ま。れ。近。江。國。伊。庭。の。庄。美。濃。國。青。柳。の。庄。
 と。こ。も。に。賜。り。し。つ。ま。れ。鴉。の。丸。の。御。劍。あり。傳。い。し。の。劍。ハ。白。河。院。
 神。泉。苑。よ。し。つ。ま。り。て。御。遊。の。序。ふ。特。次。は。く。し。て。御。覽。ど。され。ば。
 殊。よ。逸。物。と。せ。し。鴉。が。二。三。尺。む。り。あ。れ。り。の。を。被。死。あ。げ。つ。と。り。
 お。と。と。代。衆。皆。怪。し。と。と。ろ。ろ。行。り。四。五。度。よ。お。よ。び。て。後。衛。て。あ。ら。ね。

春日宮御所御遺集一巻終

をふんぐも金西復輪の太刀ありけり。近臣も奇異の事なりと
 まうりは上白王のいと不思議の思食かきうに天劍なりとて
 かりて霧の丸と名はけて流秘蔵ありけり。かて件の霧の丸は
 鳥羽院に傳えぬを亦新院へまかりせぬ。新院竟ふつが
 父よとてしたまひし恩賜の宝劍爰の中お若父が義が白糸
 威の鎧の上お佩よりけり。こえし實飲嗚呼奇なるかると嘆
 賞して技ハ玉散る秋の霜消し後も子代あり親の形見の有
 かごさ母入りも告げこの年未腰は離をことなれば往し風波の
 難は係りて此の反覆らんとせしとて小を中帆綱を切つせし
 又故婦海棠と只一刀母破らるせしも鳴袋とて火を避くはこも
 らの劍の威徳とおひり人ハ牙ふもかえがこに物もあれと且く足下

これを貸し給ふ。しや千歳へ喋雲う。幻術のありとて尋めし
 禍獸海棠と等しくとも。この靈劍を抜かばして切らむなご
 切れざらん。ちや千歳が首を刎る。さるに惑ね忠心事。あはしてそ
 と説諭し。人をやがね良將の理非明断に面以ありし。王女
 舜天九紀平治も。只顧感嘆あつりけり。そが中に陶松壽も感
 涙坐す拭ひぬる罪の疑しれを誅せと刺する宝劍也。あをし
 りのとも貸し給ふ。恩惠の固お身にありし恥を雪ぐも今宵はあ
 松壽が為るあ悪魔降伏あり。飲しと礼儀正しく受とれ劍は
 左手おかんこ。今もあれ千歳がゆしハ胸背きくひなく破
 らせくまは君も怒るれ奴原あはばあれ。あれべき限り誓とあ
 て。ひとりも脱しゆじと義次えて勇い外面に抄音とらるとれ

